

修理報告

1. 絹本着色両界曼荼羅図（伝真言院曼荼羅） 二幅

指定年月日 国宝 昭和二十八年十一月十四日

修理年度 昭和五十五・五十六年度継続

補助事業者 教王護国寺

修理施工者 岡 岩太郎

修理担当者 岡 興造、田畔徳一、脇屋助作

一、序

本図は彩色本の両界曼荼羅としては最古の一本として認められている。本図については正月八日から一週間、宮中の真言院において国家鎮護のために修法される後七日御修法の本尊という伝称があるが、この御修法に奉掛された両界曼荼羅は九副であり、本図に数倍する、例えば神護寺の高雄曼荼羅のような大曼荼羅であり、真言院所用の伝称に関しては疑問が出されている。真言院は安元三年（一一七七）に火災があり、曼荼羅も焼亡し、一時的に東寺の西院の両界曼

荼羅が用いられているが、本曼荼羅はこの西院の両界曼荼羅に相当するとする説が有力である。

図の表現は彩色が極めて鮮麗であり、強い隈取りを施された仏、菩薩の形姿は異国的な雰囲気が漂っている。制作年代はやはり九世紀と見るのが妥当であり、本図の制作には中国将来本との関係が図像上だけでなく表現的な問題として興味持たれるであろう。胎蔵界曼荼羅と金剛界曼荼羅図を較べると両者の描写、表現には、像容、筆線の動き、隈取りなどに相当の差があり、前者は自由で、より異国的な香りが強く、後者は自由さを抑制し、図式的な規制をより意識し描いていると云えよう。この両者の差は裏面の写真についても確認される。金剛界では十字の線を引いて位置を確定にし、尊像も正中線に依って厳格な均衡を見ながら描写しており、“写す”意識が感じられる。両図の性格の違いは当然あるところであるが、少くも両者の間には“手”の違いがあることは明らかといえるであろう。掲載の図版は表裏が対照できるようにしてみた。本図は裏彩色は一切施されていないので見事な筆描、作画法の特徴などを観察することが出来る。

一一、損傷状況とその対応

(1) 本体の修理について

本図は絹地を三枚縫い合わせて描いている。描写は全て表からであり、下図の墨線は全て彩色によって覆われており、彩色層はかなり厚い。

図の損傷は縦横の折れ、小欠失、継ぎ目の絹地の欠損、絹継ぎの

ある軸装の通例の形であるが、その程度はかなり重度である。肌裏の糊の接着力が弱まって傷口が浮き上り、また切断して断片化した絹地も欠失の危険が迫っており、展示はおろか通常の取り扱いにも危険を感じる程であった。特に胎蔵界の下辺、外縁部に於てそうであった。彩色層は時代の古さに比して良く保存されている。頻繁に奉懸するものではなかったためであろう。しかし、衣の彩色文様などを見るとかなり摩損が進んで来ていると思わせる。

このような損傷にあつて修理方針の設定と絡んで一つの問題となつたのが古い補絹の取り扱いである。

本図はすでに相当の小欠失があり、これ等の欠損部には補絹を裏から大き目に貼り当て、補筆が加えられている。補絹の施工は拙なく、絹と絹との重なりが新たな欠損の拡大を起している。このような場合補絹は全て除去し、施工し直すことはより健全な保存を計る修理としては望まれることであり、また一般的にはそうすることを方針として来ている。しかし、ここで一つの問題があるとするのは、補絹を全て取り替えると、図の一部が減少したかに印象され得ることもあるということである。

概していえば、古い修理の補絹は絹地の選択に細心さを欠き、補彩、補筆は感覚的にもそして技術的にも拙いことを常としている。一つの画面の中で安定した視覚効果を得てはいないのである。しかも、裏打替の修理工程の際に水分によって積年の塵埃、汚れが取り除かれるとその拙さ、効果として馴染の悪さが際だつてくるのである。このためにあえて古い補絹や補彩は再用手しないのである。本図の補絹についてはすでに述べたように絹地は粗くかつ織目が粗きに過ぎ、補筆は象形、彩色共に図の素晴らしさに比べあまりにも拙い。

これを再使用すると今述べた効果の馴染の悪さは際だつてくること予想すること容易である。しかし、図が曼荼羅であり、かつその伝来の重大さを考え、補筆部分は図像に係る部分は再用手することにし、他の部分に関しては裏打を更新し、張り張り乾燥に入つた段階で、全てを原本と照合して使用、不使用を再検討することにした。このため、数百片を超える旧補絹は全て原位置が確認出来るように整理して修理が進められている。こうした検討によつて再使用となつた旧補絹は裏打を施し、今日行っている方法によつて欠失の形に切り、元の位置に箆め込めるようにして貼り付けている。

補彩についても方針の設定については事前に十分な検討を加え、技術的には段階的に再検討を繰り返している。旧補絹の一部に使用していることで補彩はより複雑にならざるを得ないし、技術的にもまた感覚的にも屈折した判断をせざるを得ない。補絹の絹地、色合い、補筆の拙さの他に、補絹上にあつた本来の絹地が欠失を拡大し、一つの補絹の上で色合いの不統一、不均一が生じているからである。また新たな補絹部に対する補彩は一般論としては古色によつて視覚的な安定を計ることを基本としているが、本図の場合、彩色があまりにも鮮麗であり、かつ量を持つているために古色だけでは視覚的な安定は難困である。緑青の部分や群青の部分は古色の補彩も比較的馴染みやすいのだが特に鮮麗な朱や重量感のある黒の部分においては欠失の形、位置、相互の関係から感覚的には古色が拒否されるようなところも生じてくるといってよい。従つて中台八葉院等の朱の蓮花のごく一部、金剛界理趣会等の結界の黒の部分は原本に近づけた補彩を行っている。

(2) 表具について

表具は風帯無ししの総地廻しの形式で、紐で巻いて止めている。しかし、本図のような大幅の場合、通常の形式では標木も大きく重くなり、紐を巻き付けた時に、表具のみならず画面を傷める大きな原因となることが多い。このことを考え、本図の表具は通常の形式を廃して古式を一部取り入れた乳を付けた形式とし、紐で巻かず、乳を伸ばした帯び巻き、乳につけた袋縫の紐で止めるようにした。標木の形も巻いた時にこれが当って負担にならないような形に改めた。風帯は無くても特に形式上の異和感も無いので付けないことにした。

本図の表装裂地は羯摩に宝輪の段文様の錦が用いられていた。今日の錦に較べると大変薄手の織成であり、これを相当に打ち叩いて使用している。時代は鎌倉時代とすることが可能との専門家の見解があるように裂地としては貴重性が高い。現状は相当に摩耗、やつれが進んでいるので、再使用は避け、裏打って別に保存することにした。新しい裂地はこの錦を復原して用いたが、織成に用いた糸の色の復原には吉岡常雄氏（大阪市立大学教授）の協力を仰いでいる。

なお、近年の修理では裂地に関しては金襴だけでなく、機会があれば錦の使用を検討し、かつ勧められている。錦の使用にも、文様、織成の技術、古さへの適応の方法など問題は無いわけではないが、錦は仏画の表装にかなり使用されたことはこうした事例や文献でも確かめられ、一つの古き表装の美の復原を試みることで、表具の画一さも避けられると思うからである。蛇足ながら現在の修理の努力の一つとして付言しておく。

二、修理記録

1 品質

胎藏界曼荼羅 (三副一舗、縦一八六七cm、横一六四・二cm)	緯糸	経糸	緯糸	経糸	絹巾 (左より)
(1) 70 × 2枚	28 × 中	28 × 中	28 × 中	28 × 中	1尺8寸
(2) 70 × 2枚	28 × 中	28 × 中	28 × 中	28 × 中	1尺8寸3分
(3) 70 × 2枚	28 × 中	28 × 中	28 × 中	28 × 中	1尺7寸9分

(28中 × 3、21中 × 4)

金剛界曼荼羅 (三副一舗、縦一八七・三cm、横一六四・二cm)

緯糸	経糸	緯糸	経糸	絹巾
(1) 70 × 2枚	28 × 中	105横	110中	1尺8寸
(2) 70 × 2枚	28 × 中	120横	90中	1尺8寸2分
(3) 70 × 2枚	28 × 中	110横	100中	1尺8寸2分

(緯糸は三本軽い撚りになっている)

(広瀬敏雄氏の観察による)

2 表具仕様

寸法 縦 六尺二寸一分 (二七四・六cm)

横 九尺六分 (二八八・二cm)

様式 草の草 (総地廻し、風帯無し)

裂地 宝輪羯摩宝相華唐草文段錦 (新調)

軸首 木地 (紫檀) 螺鈿宝輪文軸 (新調)

(各々に桐製の太巻添軸、二重箱を新調した)

(渡辺明義)